

Title	The Iwasawa main conjecture and Gauss sums (Algebraic number theory and related topics)
Author(s)	青木, 美穂
Citation	数理解析研究所講究録 (2000), 1154: 1-9
Issue Date	2000-05
URL	http://hdl.handle.net/2433/64135
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

The Iwasawa main conjecture and Gauss sums

都立大 青木 美穂 (Miho Aoki)

1 はじめに

p を奇素数とし, 以下固定する. K/\mathbb{Q} を p が tamely ramified である虚な有限次 abel 拡大とし, $\Delta := \text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ とおく. K_∞/K を円分 \mathbb{Z}_p 拡大, X を K_∞ の最大不分岐 abel pro- p 拡大の Galois 群とする. Iwasawa main conjecture は Δ の odd な指標 χ に対し, X の χ -part X_χ の特性イデアルが $\omega\chi^{-1}$ に付随する p 進 L 関数で書けることを主張している. ここで, $\omega : (\mathbb{Z}/p)^\times \rightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ は Teichmüller 指標を表す.

Mazur と Wiles [MW] は, この Iwasawa main conjecture を保型形式を使い K_∞ の不分岐拡大を構成するという方法で証明した. その後 Rubin は Kolyvagin [K] が導入した円単数の Euler system を用いて, この conjecture に新しい証明を与えた [R1]. Rubin は円単数を用いて, イデアル類群のプラスパートを調べ最後に双対性を使って上に述べたような Iwasawa main conjecture の対象とするマイナスパートへ移るという方法で証明を与えた. すなわち Rubin の証明は本来この conjecture の対象であるマイナスパートを直接扱うものではない.

ここでは円単数の代わりに Gauss 和を用いて, イデアル類群のマイナスパートを直接扱い, p 進 L 関数との関係を調べる. その結果, この conjecture に対し新しい証明を与える. 証明で用いられる Gauss 和の Euler system は円単数の Euler system と同様に Kolyvagin [K] が導入したもので Rubin [R2] は, この Gauss 和の Euler system を用いて基礎体 K のイデアル類群のマイナスパートの構造を調べている. ここでは Gauss 和の Euler system を K_∞/K の各中間体に対し組織的に用いて Iwasawa main conjecture に証明を与える.

2 Iwasawa main conjecture

この節では, Iwasawa main conjecture の formulation を与える. K/\mathbb{Q} を前節のように p が tamely ramified である虚な有限次 abel 拡大とする. $\Delta := \text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ の任意の指標 χ に対し \mathbb{Z}_p 上 χ の像で生成される環を \mathcal{O}_χ , $\underline{\mathcal{O}}_\chi$ で χ を通し $\mathbb{Z}_p[\Delta]$ -加群と見なしたものを表すことにする. 任意の $\mathbb{Z}_p[\Delta]$ -加群 \mathfrak{M} に対し $\mathcal{O}_\chi[\Delta]$ -加群 \mathfrak{M}_χ を以下のように定め \mathfrak{M} の χ -part と呼ぶことにする. すなわち

$$\mathfrak{M}_\chi := \mathfrak{M} \otimes_{\mathbb{Z}_p[\Delta]} \mathcal{O}_\chi$$

と定義する. 各 $m \geq 0$ に対し, K 上 p^m 次である K_∞/K の唯一の中間体を K_m とおく. A_m を K_m のイデアル類群の p -part とすると, 前節における K_∞ の最大不分岐 abel pro- p 拡大の Galois 群 X は類体論から A_m をノルムに関して射影極限をとったものになる. すなわち, $X = \varprojlim A_m$ である.

$$\Gamma_m := \text{Gal}(K_m/K), \quad \Gamma := \text{Gal}(K_\infty/K)$$

とおくと

$$\text{Gal}(K_m/\mathbb{Q}) = \Delta \times \Gamma_m, \quad \text{Gal}(K_\infty/\mathbb{Q}) = \Delta \times \Gamma$$

と分解する. 各 $m \geq 0$ に対し A_m は $\mathbb{Z}_p[\Delta \times \Gamma_m]$ -加群であるから, X は $\varprojlim \mathbb{Z}_p[\Delta \times \Gamma_m] = \mathbb{Z}_p[[\Gamma]][\Delta]$ -加群である. ここで, 完備群環 $\mathbb{Z}_p[[\Gamma]]$ は

$$\mathbb{Z}_p[[\Gamma]] := \varprojlim \mathbb{Z}_p[\Gamma_m]$$

で定義する.

$$\Lambda_\chi := \mathcal{O}_\chi[[\Gamma]] \simeq \mathcal{O}_\chi[[T]]$$

とおくと, $X_\chi = X \otimes_{\mathbb{Z}_p[\Delta]} \underline{\mathcal{O}}_\chi$ は $\Lambda_\chi[\Delta]$ -加群となる. ここで同型 $\mathcal{O}_\chi[[\Gamma]] \simeq \mathcal{O}_\chi[[T]]$ は Γ の位相的生成元 γ を一つ固定し, γ に $1+T$ を対応させて得られる. 1節に現れた X_χ の特性イデアル $\text{char}(X_\chi)$ を定義する. 岩澤先生の定理から, X_χ は有限生成 torsion Λ_χ -加群であるから

$$X_\chi \sim \bigoplus_{j=1}^k \Lambda_\chi / f_j \Lambda_\chi, \quad f_j \in \Lambda_\chi$$

と書ける. ここで, \sim は有限のずれを無視した同型を表す. そこで, $\text{char}(X_\chi)$ を $(\prod_{j=1}^k f_j)$ が Λ_χ の中で生成する単項イデアルとして定義する. すなわち,

$$\text{char}(X_\chi) := \left(\prod_{j=1}^k f_j \right)$$

である. 一方, 岩澤先生は Kubota-Leopoldt の p 進 L 関数が巾級数の中に存在することを示した. すなわち Δ の任意の even な指標 $\chi (\neq 1)$ に対し, 巾級数 $G_p(\chi, T) \in \Lambda_\chi \simeq \mathcal{O}_\chi[[T]]$ で以下を満たすものが存在する.

$$G_p(\chi, \kappa(\gamma)^s - 1) = L_p(\chi, s), \quad s \in \mathbb{Z}_p$$

ここで $\kappa : \text{Gal}(K_\infty/\mathbb{Q}) \rightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ は円分指標であり, $L_p(\chi, s)$ は Kubota-Leopoldt の p 進 L 関数を表す. Iwasawa main conjecture とは以下のような主張である.

定理 2.1 [Iwasawa main conjecture] Δ の任意の odd な指標 $\chi (\neq \omega)$ に対し Λ_χ のイデアルとして以下の等式が成り立つ.

$$\text{char}(X_\chi) = (G_p(\omega\chi^{-1}, T)).$$

以下で与える証明では, この定理の両辺に現れるイデアル類群のマイナスパートと p 進 L 関数とを直接関係づけていく. その両者の仲介役をなすのが Gauss 和の Euler system である.

3 Gauss 和の Euler system

この節では, Gauss 和の Euler system について述べ, Gauss 和がどの様にイデアル類群と p 進 L 関数との仲介役をするかという事について述べる. F/\mathbb{Q} を任意の有限次 abel 拡大とし, その conductor を $N = p^t N_0$, $t \geq 0$, $p \nmid N_0$, $N_0 \equiv 2 \pmod{4}$ とおく. $L := \mathbb{Q}(\mu_N)$ とおくと $F \subset L$ である. M を $M \geq p^t$ をみたす p の巾とし, 集合 S を以下で定める.

$$S := \{ n \in \mathbb{N} \mid n \text{ は square free かつ} \\ \text{任意の } n \text{ の素因子 } \ell \text{ は合同式 } \ell \equiv 1 \pmod{MN_0} \text{ をみたす.} \}$$

$n \in S$ に対し $r \equiv 1 \pmod{nN}$ となる素数 r をとり r の上にある $L(\mu_n)$ の素イデアル \mathfrak{A} を一つ固定する. character $\varepsilon_{n,\mathfrak{A}} : (\mathbb{Z}/r)^\times \rightarrow \mu_{nN}$ を以下をみたすものとして定義する.

$$\varepsilon_{n,\mathfrak{A}}(a) \equiv a^{-\frac{r-1}{nN}} \pmod{\mathfrak{A}}$$

この時, Gauss 和 $g(n, \mathfrak{A}, \zeta_r)$ を以下で定義する.

定義 3.1 (Gauss 和)

$$g(n, \mathfrak{A}, \zeta_r) = \sum_{a=1}^{r-1} \varepsilon_{n,\mathfrak{A}}(a) \zeta_r^a \in L(\mu_{rn})^\times.$$

次に, この Gauss 和 $g(n, \mathfrak{A}, \zeta_r)$ から $F(\mu_n)^\times$ の元を定義する. $\delta \in \text{Gal}(L/\mathbb{Q})$ を固定し, $\tilde{\delta} \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_{nN})/\mathbb{Q})$ をその延長とする. 各 $n \in S$ に対し, $b_n \in \mathbb{N}$ を以下で定める.

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_{nNM})/\mathbb{Q}) \cong (\mathbb{Z}/nNM)^\times \cong \text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_{nN})/\mathbb{Q}) \times \text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_n)/\mathbb{Q})$$

$$b_n \mapsto (\tilde{\delta}, 1).$$

このとき, 任意の $\zeta \in \mu_{nNM}$ に対し $\zeta^{\tilde{\delta}} = \zeta^{b_n}$ が成り立つ.

$$\alpha(n, \mathfrak{A}) = g(n, \mathfrak{A}, \zeta_r)^{\delta - b_n} \in L(\mu_n)^\times$$

とおき, さらに \mathfrak{A} の下にある $F(\mu_n)$ の素イデアル \mathfrak{r} に対し

$$\alpha(n, \mathfrak{r}) = N_{L/F} \alpha(n, \mathfrak{A}) \in F(\mu_n)^\times$$

と定義する. ここで $N_{L/F} : L(\mu_n)^\times \rightarrow F(\mu_n)^\times$ はノルム写像を表す. $\alpha(n, \mathfrak{r})$ は \mathfrak{A} のとり方によらず well-defined に定まることが確かめられる. これら $\alpha(n, \mathfrak{r})$ は Euler system をなし, かつそれぞれがイデアル類群, p 進 L 関数の両者に関係していることから Iwasawa main conjecture を証明するための細かな情報を与えてくれる. 実際にどのように $\alpha(n, \mathfrak{r})$ がイデアル類群と p 進 L 関数に関係しているのかを次にみていく. はじめに $n \in S$ に対し Stickelberger element $\theta(n)$ を以下で定義する.

定義 3.2 (Stickelberger element)

$$\theta(n) = (\delta - b_n) \sum_{\substack{a=1 \\ (a, nN)=1}}^{nN} \frac{a}{nN} \tau_a^{-1} \in \mathbb{Z}[\text{Gal}(L(\mu_n)/\mathbb{Q})].$$

ここで $\tau_a \in \text{Gal}(L(\mu_n)/\mathbb{Q})$ は任意の $\zeta \in \mu_{nN}$ に対し $\zeta^{\tau_a} = \zeta^a$ をみたす元である。各 Galois 群の元を $F(\mu_n)$ に制限することにより $\theta(n) \in \mathbb{Z}[\text{Gal}(F(\mu_n)/\mathbb{Q})]$ とみなす。岩澤先生の定理より、この Stickelberger element は p 進 L 関数を構成することが分かる。また Stickelberger element はイデアル類群の annihilator であることを主張する以下の定理が知られている。

定理 3.3 (Stickelberger)

$$(\alpha(n, \tau)) = \theta(n)\tau$$

すなわち、イデアル類群と p 進 L 関数を構成する $\theta(n)$ の両者に Gauss 和 $\alpha(n, \tau)$ は関係している:

$$F(\mu_n) \text{ のイデアル} \longleftrightarrow \begin{array}{l} \theta(n) \\ \alpha(n, \tau) \end{array}$$

我々が知りたいのは F のイデアルの情報である (後で F として、円分 \mathbb{Z}_p 拡大 K_∞/K の各中間体 K_m をとる)。そこで、上の関係と類似した F での図式:

$$F \text{ のイデアル} \longleftrightarrow \begin{array}{l} \delta(n) \\ \kappa(n, \rho) \end{array}$$

を作る。 $\delta(n)$, $\kappa(n, \rho)$ の説明をする。任意の素数 $\ell \in S$ に対し σ_ℓ を $\text{Gal}(F(\mu_\ell)/F) \simeq (\mathbb{Z}/\ell)^\times$ の生成元とし、

$$D_\ell = \sum_{i=0}^{\ell-2} i \sigma_\ell^i$$

とおく. 自然数 $n \in S$ に対しては,

$$D_n = \prod_{\ell|n} D_\ell$$

で定義する. 前に定義した Stickelberger element $\theta(n)$ に対し

$$D_n \theta(n) \in N_n \{(\mathbb{Z}/M)[\text{Gal}(F/\mathbb{Q})]\}$$

であることが確かめられる. ここで N_n はノルム $N_n = \sum \tau$, $\tau \in \text{Gal}(F(\mu_n)/F)$ を表す. そこで $\delta(n) \in (\mathbb{Z}/M)[\text{Gal}(F/\mathbb{Q})]$ を以下で定義する.

$$D_n \theta(n) = N_n \delta(n).$$

次に $\kappa(n, \rho)$ の説明をする. これを定義するために F/\mathbb{Q} は虚な有限次 abel 拡大という仮定をおく.

$$\text{Gal}(F/\mathbb{Q}) \simeq \Delta \times G_p, \quad p \nmid |\Delta|, \quad G_p : p \text{ 群}$$

とおき, $\chi (\neq \omega)$ を Δ の odd な指標とする. この時, 任意の $\mathbb{Z}_p[\Delta]$ -加群 \mathfrak{M} に対し functor $\mathfrak{M} \mapsto \mathfrak{M}_\chi := \mathfrak{M} \otimes_{\mathbb{Z}_p[\Delta]} \underline{\mathcal{O}}_\chi$ は exact となる. $a \in \mathfrak{M}$ の像を $a_\chi \in \mathfrak{M}_\chi$ とおくことにする.

$\alpha(n, \mathfrak{r}) \in F(\mu_n)^\times$ に対し,

$$\alpha(n, \mathfrak{r})^{D_n} \in [F(\mu_n)^\times / (F(\mu_n)^\times)^M]^{G_n}, \quad G_n = \text{Gal}(F(\mu_n)/F)$$

が成り立つので ρ を \mathfrak{r} の下にある F の素イデアルとし $\kappa(n, \rho) \in (F^\times / (F^\times)^M)_\chi$ を以下で定める.

$$(F^\times / (F^\times)^M)_\chi \simeq ([F(\mu_n)^\times / (F(\mu_n)^\times)^M]^{G_n})_\chi$$

$$\kappa(n, \rho) \mapsto (\alpha(n, \mathfrak{r})^{D_n})_\chi$$

$\kappa(n, \rho)$ は \mathfrak{r} のとり方によらず定まる. $\mathcal{L} := \bigoplus_\lambda \mathbb{Z}\lambda$ を F のイデアル群とし, 単項イデアル $(x) \in \mathcal{L}$ の $\mathcal{L}/M\mathcal{L}$ での像を $[x]$ とおく. ρ , $\delta(n)$, $\kappa(n, \rho)$ の間には Stickelberger の定理 (定理 3.3) と類似した以下の関係式が $(\mathcal{L}/M\mathcal{L})_\chi$ において成り立つ.

$$[\kappa(n, \rho)] = \delta(n)_\chi \rho_\chi + (n \text{ を割る素数イデアルの成分}).$$

この関係式が今回の証明において重要な役割をする.

4 証明の概略

K/\mathbb{Q} を虚な有限次 abel 拡大とし K^+ で K の最大実部分体を表すことにする. ここで以下の仮定をおく.

仮定

I. $p \nmid [K : \mathbb{Q}]$.

II. p の上の任意の素イデアルは K/K^+ で不分解.

$\chi (\neq \omega)$ を odd な第一種の指標, すなわち χ の conductor f_χ は $f_\chi = p^a N_0$, $a = 0$ or 1 , $p \nmid N_0$, $N_0 \equiv 2 \pmod{4}$ という形に書けているとする. K_χ を χ の kernel に対応する体とする. $K = K_\chi(\mu_p)$ とし, χ を $\Delta := \text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ の指標とみなした場合を示せば十分であることが確かめられる. この時, 円分 \mathbb{Z}_p 拡大 K_∞/K の各中間体 K_m の conductor は $p^{m+1}N_0$ となる. 中間体 K_m を一つ固定し, p の巾 M を十分大きくとる. この K_m に対し 3 節の結果を用いると任意の $n \in S$ に対し $\delta(n) \in (\mathbb{Z}/M)[\text{Gal}(K_m/\mathbb{Q})]$ が定まる. 分解

$$\text{Gal}(K_m/\mathbb{Q}) \simeq \Delta \times \Gamma_m$$

より

$$\delta(n)_\chi \in (\mathbb{Z}/M)[\text{Gal}(K_m/\mathbb{Q})]_\chi \simeq (\mathcal{O}_\chi/M)[\Gamma_m] \simeq \Lambda_\chi/(M, \omega_m)$$

である. ここで多項式 ω_m は $\omega_m := (1+T)^{p^m} - 1$ で定義する.

定義 4.1 任意の $n' \in S$ に対し, 集合 $\{ \delta(n)_\chi \mid n \text{ は } n' \text{ の約数} \}$ で生成される $R_{m\chi} := \Lambda_\chi/(M, \omega_m)$ のイデアルを $T_{n'}^\chi$ とおく.

定義より $T_1^\chi = (\delta(1)_\chi)$ であるが h_0 を $G_p(\omega\chi^{-1}, T)$ の $R_{m\chi}$ での像とおくと, Stickelberger element が p 進 L 関数を構成することから $T_1^\chi = (\delta(1)_\chi) = (h_0)$ が成り立つ. 2 節で述べたように, $X_\chi \sim \bigoplus_{j=1}^k \Lambda_\chi/f_j \Lambda_\chi$, $f_j \in \Lambda_\chi$ が成り立つが, イデアル類群と関係する f_j は, Stickelberger element から構成された $\delta(n)_\chi$ と以下のように関係づけられることが示される.

定理 4.2 以下の性質を満たす素数の集合 $\{r_j\}_{1 \leq j \leq k}$ が存在する.
 $n_j = r_1 \dots r_j$ とおくと, ある $h_j \in T_{n_j}^X$ が存在し R_{m_X} において次の関係式を満たす.

$$f_j h_j = \eta h_{j-1}.$$

ここで η は p の巾であり, 全ての中間体 K_m に対し共通にとれる. (ただし M は η より十分大きくとれる.)

この定理は Cheboterev の密度定理と, Gauss 和 の Euler system を用いて h_j を帰納的に構成していくという方法で示される. 具体的に述べると, $h_{j-1} \in T_{n_{j-1}}^X$ を生成元を用いて

$$h_{j-1} = \sum_{n|n_{j-1}} g_n \delta(n)_X, \quad g_n \in R_{m_X}$$

と書いた時, 適当な K_m の素イデアル λ を選び,

$$\beta := \prod_{n|n_{j-1}} \kappa(n, \lambda)^{g_n},$$

$$W := \beta R_{m_X} \subset (K_m^\times / (K_m^\times)^M)_X$$

とおき, ある種の条件をみたす R_{m_X} -準同型 $\psi : W \rightarrow R_{m_X}$ を構成する. $h_j = \psi(\beta)$ とおくと, この h_j は $h_j \in T_{n_j}^X$ かつ $f_j h_j = \eta h_{j-1}$ を満たすことが示せる.

定理 4.2 の h_j の極限をとり Ferrero-Washington の定理 [FW] から $p \nmid f_j$ が成り立つことを用いると Λ_X の元 ϑ_j^X が以下のように得られる.

定理 4.3 任意の j , $1 \leq j \leq k$ に対し, Λ_X の元 ϑ_j^X で $f_j = \vartheta_{j-1}^X / \vartheta_j^X$ となるものが存在する.

ここで, $\vartheta_0^X = G_p(\omega_X^{-1}, T)$ である.

定理 4.3 からイデアルの包含関係

$$\text{char}(X_X) \supset (G_p(\omega_X^{-1}, T))$$

が導かれ, 類数公式を用いた岩澤先生による手法を使うと, 定理 2.1 [Iwasawa main conjecture] が示される.

参考文献

- [A] M. Aoki, The Iwasawa main conjecture and Gauss sums, in preparation.
- [FW] B. Ferrero and L. Washington, The Iwasawa invariant μ_p vanishes for abelian number fields, *Ann. of Math.* 109 (1979), 377-395.
- [G] C. Greither, Class groups of abelian fields and the main conjecture, *Ann. Inst. Fourier (Grenoble)*, 42 (1992), 449-499.
- [I] K. Iwasawa, Lectures on p -adic L-functions, Princeton, Princeton Univ. Press and Univ. of Tokyo Press (1972).
- [K] V. Kolyvagin, Euler systems, *The Grothendieck Festschrift II*, *Progr. Math.* 87(1990), Birkhäuser, 435-483.
- [MW] B. Mazur and A. Wiles, Class fields of abelian extensions of \mathbb{Q} , *Invent. math.* 76 (1984), 179-330.
- [R1] K. Rubin, The main conjecture, Appendix to S.Lang, *Cyclotomic Fields I and II*, Springer (1990).
- [R2] K. Rubin, Kolyvagin's system of Gauss sums, *Arithmetic Algebraic Geometry*, *Progr. Math.* 89(1991), Birkhäuser, 309-324.
- [W] L. Washington, *Introduction to Cyclotomic Fields*, 2nd ed, GTM83, Springer (1997).

Department of Mathematics, Tokyo Metropolitan University, Minami-Ohsawa
1-1, Hachioji, Tokyo, 192-0397 Japan

E-mail address: maoki@comp.metro-u.ac.jp